

# 令和元年度保育所自己評価

社会福祉法人さいわい福祉会  
野ばら保育園  
野ばら第二保育園

## I 環境の見直し…園舎内の改修

### ① 野ばら保育園

昭和52年建設の園舎が43年経っているので一部屋ずつ段階を追って改修中

- ① 一歳児室改修(平成27年度完了)
- ② 事務所及びピロティ(令和元年度6月)
- ③ 全体の園舎の壁及び屋上(令和元年度6月)
- ④ 0歳児室全面改修(令和3年度3月)

### ② 野ばら第二保育園

平成8年度建設園舎の一部改修

- ① 鉄骨部分の塗り替え
- ② 送迎用鉄骨ガラス屋根改修

## II 俸給表の見直し

- ① 常勤職員(長時間パート勤務)は長年勤務の者が多くなり、保育の質の向上の一端を担っていることを踏まえ定期昇給型の俸給表を新規に作成する。
- ② 各職員の前歴勤務年数を換算して等級を決定し、4月にさかのぼって差額与給をした。
- ③ これに伴って賞与の方も配慮した。

## III 福岡県市民教育賞受賞(令和元年11月)

この賞は教育現場において、子ども達に伝えるべき本来の教育の本質に迫る活動をした人に贈られる賞だが、今年度、理事長 幸 政恵氏が受賞。これは、全職員が一丸となって保育・教育の内容に真摯に取り組み、絶えず前向きに学び合っている成果と考えている。

## IV 保育内容では特に下記の事に強化・継続維持

- ① ノーテレビデーの継続と絵本の取り組み
- ② わらべうた・リズム運動の継続
- ③ 運動あそび(安田式体育)の継続と、毎朝の体のこなしとしてサーキット遊びを全園児取り組む(0才児は、わらべうたマッサージ)
- ④ 3コーナーの充実継続…好きなコーナーで自由に遊ぶ
  - ① 構築構造遊び(つみ木コーナー)
  - ② ごっこ遊び(ままごと・お世話コーナー)
  - ③ 机上遊び(いろいろな教具・玩具を使って…)
- ⑤ 年長児は、竹太鼓・和太鼓・竹馬・手仕事(雑巾がけ・マフラー編み・織物など)もじ遊び・お手紙ごっこ・フッキング活動等を継続
- ⑥ 職員会議の中で重点課題コーナーを設け、テーマに沿って討議し、専門職として保育の質向上を図る
- ⑦ 保育士のための自己チェックをし、自分の保育の振り返りをする

## 保育内容面

### ・元年度テーマに沿った保育の展開

令和元年度のテーマは、昨年に続き「つながる保育」、平成 30 年度のサブテーマ「つなげよう みんなの目と目・手と手・心と心」をさらに深めようと「遊びごころ（遊戯性をもった保育の実践）」をキャッチフレーズに、より楽しい集団づくりを各クラスが意識して共に育ち、共に育ち合う関係を作っていた。6月の職員会議で遊戯性について話し合い、「遊戯性とは、ただ遊び気分で行う事ではなく、その中に教育的な要素が含まれる事が大事ではないか？」「実際に取り組んでいる安田式体育や文字活動にも遊戯的な要素がたくさん入っている。」「わらべうたは一人から二人、三人と集団につながる様に意識している」等、意見を出し合い、職員間で共通認識して進めていくようにしました。「遊びごころ」を職員も常に意識して、子ども達が楽しいと興味、関心を持ってくれる様に言葉がけを工夫したり、音楽を上手に取り入れたり、寸劇をしたりしながら保育を豊かに展開していきました。年長児はとさんは、お泊り保育の肝だめし（おぼけやしき）の時、1人の男児が怖さの為、自分を励まそうと「勇気、友情、そして遊びごころ、ウィッシュ ウィッシュ ユー」と言い出し、他児も口々に言い出して、肝だめしを乗り越えました。それからは、運動会や太鼓等、頑張る時にこの合言葉が子ども達から自然と出て、一致団結の強さを見せてくれました。又、子ども達だけでなく大人同士も遊戯的につながっていける様に心がけた。

### ・職員間では

今年度は、経験の長いリーダー格の保育士2人が退職しましたが、若い新しい風を取り入れ、保育業務にやりがいを感じるように方向づけた。ユーモアのある職員関係が保てるように心掛け、子ども達の育ちを見守っていった。

### ・毎朝の運動

昨年度より、子ども達の運動量不足が課題と外部講師の先生より指摘されていたので、引き続き体を動かす運動を意識していく。短い時間でも継続する事が大切だと、サーキット遊びとリズム運動を毎朝交互に取り組みました。運動量が増えていった為か動きが機敏になり、昨年に比べて、転んだり、ぶつかったり、けがをする回数がとても減って嬉しく思っている。これをきっかけに職員の中で運動あそび研究会が発足し、野ばら、野ばら第二の各クラスリーダーが集まり、今迄の積み上げを記録に残し、見える化を図る。

### ・室内遊び

室内遊びは、3 コーナー（①構築構造(つみき) ②ごっこ遊び ③机上遊び）の充実を念頭に各コーナーに保育士が位置付き、遊びを提供、促して遊びを助けていきました。保育士がねらいを持って関わるので、ひとりひとりの発達や興味に合わせて進められて、クラス全体に広がり落ち着いている。3歳未満児クラスは、特に意識して年間を通して実践ができた。3歳以上児クラスの構築コーナーは、想像力を発揮して素晴らしいものが出来ていた。コミュニケーションを高めるルールのあるゲーム遊びや、創造性を培う工作や粘土遊びは少なかったように思います。次年度はもう少し大人が入り、遊びを発展させる必要があると感じました。

### ・わらべうたの充実

わらべうたも1対1から2人、3人、集団へと広げてきた。職員の入れ替わりもあり、今一度、原点にかえて継続化を図るために、わらべうた研究家の広渡先生を講師に各クラスでの実践研修を実践。どの職員も子どもと情緒豊かに関わっていければと願っている。

### ・環境

保育環境の3S（整理・整頓・清掃）については、引き続き、物を大切に効率的に活用できる様に継続していきたいです。

## 保育内容面

### 1. テーマに沿った保育の展開

テーマ “つながる保育パートⅡ～遊びころをもって～”

令和元年度は、引き続き上記テーマを掲げ保育を進めていった。

日々の保育がつながっていき、ひとりひとりの子どもが豊かな成長が育めるようにあそびころ（遊戯性をもった保育の実践）を加えてより楽しい集団作りを各クラスが意識して、共に育ち共に育ち合う関係を作っていけるように努力して進めていった。

そのために子どもと丁寧に関わること、肯定的な言葉かけ、一人一人にあった対応、遊具の提供を行い

#### ・ 小さいクラスでは

見通しをもち、安心してすごせる毎日を大切に行う。小さな成長を保護者の方と一緒に喜び合える信頼関係の構築。

#### ・ その上で大きいクラスでは

子どものいいところに気づき友だちの中で認めあえる仲間づくりをすることで、自己肯定感を育てているところ。けんかもトラブルも友だちがいるからこそでき、人の思いに気づき、人の立場にも思いを寄せられるような人になれるようにし、又自分の思いと折り合いをつけながら人として育ててもらいたい思いをもって保育していった。

#### ・ 職員間では

クラス内では常に話し合いをしながら進めていく。時にはクラスの垣根をこえて相談することも多かった。お互いに助けて！ヘルプ！といえる仲間をいたい。話すこと、伝えること、わかちあうことも大切にしていきたいという思いで仕事をしていく。しかし、昨今それぞれ年齢も職場経験も様々で感じ方の違いなどで人に対する伝え方の難しさは感じている。

※前年度の苦情解決の多くが他園からこられた先生にむけてが多く、野ばらの保育の理念、保育の特徴、大切にしていることをどのように伝えていくのがよいのかが課題にもなっている。

### 2. 運動あそび研究会の発足

安田式体育あそび研究所の居関先生の運動あそびの研修は、年3回の実践研修を20年近く続けており、毎回実践を通しての学びが沢山あった。各担当クラスでの実践なので、保育士の先生は即子どもたちに学んだことを生かして保育ができていく。

学びが沢山あるがその時々で終わって園としての積み上げができていなかったため、野ばらとしての運動あそびの充実がはかれるように運動あそび研究会を発足する。

理事長先生をはじめとし主要なメンバーで話し合い、まずは朝の運動サーキットを保育士が順番で担当しどんなことをしていたか記録に残し、継続して続けていけるようにしていった。又、新しく園で勤める人にもわかりやすくできるようにすることもねらいにおき進める。

日々日課の中に取り入れることで子どもの体の身のこなしがよくなっている。これからのサーキットや運動あそびの展開も意識してとりくむようになってきた。

### 3. 気になる子どもの支援

・気になる子ども達の支援について専門機関と連携をとり、より豊かな成長ができるようにしていく中で、巡回相談、個人懇談など記録のとり方をつながってみていけるような書き方に変えた。それによりその子の成長や今後の課題がより見やすくなった。

#### ・保護者との話し合い

加配をして対応している保護者との話し合いを年2~3回設けて家庭と園での様子を伝え合い保護者の気持ちに寄り添いながらすすめていった。話し合いを設けることで園で行っている個人配慮を伝えることができ、保護者と共にその子の成長を喜び、確かめあって次のステップへ行きやすくなった。同じ方向性で進められるようになってきたのが良かった。

### 4. 職員の休憩時間について

子ども達の午睡中は連絡ノート書きや保育準備などでなかなかはっきりと休憩時間としてとっていなかった。園全体として以上児クラス、未満児クラスとも協力しあい、休憩をとれるようにしていった。休憩するという意識をもつことで、体を休めリフレッシュして、子ども達との関係性も良くなるように努力していった。

※新学期などは難しい時もあるが、職員会議などで話し合いながら、改良を重ね休憩のあり方を模索しているところ。